



特集

## いつも心に、交通安全

運転をする前に

今、わたしは社会から隔離され、刑務所の中で日々の生活を送っています。

何故でしょう？ それは、交通事故を起こしてしまったからです。しかも、ただの事故ではありません。人の命を奪ってしまったのです。

当時18歳だったわたしは、免許を取得したうれしさから、通勤はもちろんのこと、ほとんど毎日のように友人と一緒にいろいろなところへ出掛けていました。事故を起こしたその日も、友人2人とわたしの車でドライブをしていました。深夜1時を回り、友人もわたしもそれぞれ翌日に仕事や学校があったため、帰宅することになりました。

2人の友人を送る途中、ふと、「この車はどのくらいのスピードが出るのだろう？」という興味が湧きました。次第に興味は大きくなり、自分を抑えきれなくなつたわたしは、段々と車の速度を上げていきました。徐々にスピードは上がり、時速140 kmにまで達しました。

そこでわたしの意識は途切れ、気が付けば車は止まっています。訳も分からず車から出てみると、そこは道路脇にある畑の真ん中でした。

わたしは、ようやく事故を起こしたのだと気付きました。足元がおぼつかないまま歩いてみると、後部座席にいたはずの友人がうつ伏せになって倒れていました。友人の身体を何度も揺らし、名前を呼び掛けますが、ぐったりとしたままかすかに呼吸音が聞こえるだけで意識は全くありませんでした。

再びわたしは意識を失い、次に気が付いたのは病院のベッドの上でした。1日入院し、自宅へ戻ったあと、助手席にいた友人は亡くなったと父から聞かされました。わたしは、「なんてことをしてしまったのか」、「本当に亡くなってしまったのだらうか？」と、事実を全く受け入れることができませんでした。

後日、逮捕されたわたしは、留置場の中で「どうして自分が生き残ってしまったのか?」、「自分が代わりに死ねばよかった」などと考えたり、亡くなった友人と遊んでいる夢を見たりするたびに「本当は生きているんじゃないのか?」と考え、日が経つても全く受け入れることができませんでした。

事故から6カ月後、裁判の日がやってきました。法廷に入ると、亡くなった友人のご遺族の方々が、友人の遺影を持って傍聴席の一番前に座っているのが

## あがな贖いの日々

「ハンドルを握ることは、人生を握ること」。重大事故の悲劇は、その日を境にして終りなき償いの日々が続くことです。交通事故の加害者となり、刑務所で罪の償いをしている人たちの反省の記録をつづった「贖いの日々」。この手記に込められた思いが、多くの人に伝わることを願っています。

(財)東京交通安全協会発行「贖いの日々」より(一部編集)

見えました。わたしが一礼をして目の前を通り過ぎると、友人の母親が声を上げて泣き出してしまいました。裁判の終りに、友人の父親が手紙を読んでくさいました。

「お前を殺して俺も死にたい」手紙の中でそう告げられ、わたしは「本当に最低なことをしてしまった」、「なぜこんな取り返しのつかないことをしてしまったのか」と、反省と後悔の念でいっぱいになり、涙が止まりませんでした。

わたしは、危険運転致死傷害罪で懲役2年6カ月以上、4年未満の不定期刑の判決を受け、今こうして受刑生活を送っています。

事故を起こしてから今日まで、幾度となく「何故、事故を起こしてしまったのか?」ということを考えました。わたしには責任感というものが全くなかったのです。

人を乗せている以上、その人の命を預かっているのに、興味本位で時速140 kmもの高速度を出すなどあり得ないことです。しかし、わたしはこのような結果になるまで、こんな簡単なことに気付くことができなかったのです。

事故から2年半以上が経過した今、毎日のように後悔し続け

ています。そして、一生消えることのない深い悲しみ、傷を負わせてしまった被害者ご遺族の方々に対して、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

事故から1年ほど経過して、示談は成立しました。しかし、被害者ご遺族の方々がわたしを許してくれたわけではありません。残された受刑生活の中で、日々努力して罪を償っていくのはもちろんのこと、本当の償いは受刑生活が終わってから始まるものと思っています。

何が償いにつながるのか、まだ答えは見つかっていませんが、これからも自分にできることを全力でやっていきたいと思っています。そして、一生をかけて人の命を奪ってしまったという罪を償っていかうと思っています。

これから免許を取る人も、すでに免許を持っている人も、運転をする前にぜひ考えてください。

ルールを守ることの意味を。あなたのハンドルが握る命の重みを。あなたの帰りを待つ温かい笑顔のことを。

そうすれば、いつか必ず交通犯罪はなくなるはず。この世から交通犯罪がなくなることを心から祈っています。

会社員(21歳)

―特集― いつも心に、交通安全 終わり―



くらし安全指導員  
たけもと・よしやす  
竹本 芳泰さん

昭和43年広島県警に採用。42年間の警察署勤務で主に交通・地域活動の業務に携わる。平成22年4月から交通教育指導員(くらし安全指導員)として活動。

## 誰もが、交通事故の根絶を願っています。

### くらし安全指導員

平成24年度から、「交通教育指導員」を「くらし安全指導員」に改称し、1人から2人に増員。交通安全教育の推進や交通安全対策の企画・立案など、関係する諸機関と連携し、保育園、小・中学校、民間企業での交通安全教室、防犯教室など各種啓発活動や地域のパトロールを行う。また、交通安全だけでなく、防犯活動の推進、企画、立案なども行う。具体的な活動としては、草の根で地域が取り組んでいる「児童の立しよう見守り活動」を支援するなど、きめ細かな対応に取り組む。

問合せ 自治振興課 地域活動施設係  
☎09139

安全・安心のまちづくりは、一朝一夕でできるものではありません。交通安全や、防犯に関する活動は、道路整備や防犯灯などのハード部分を除いては、地道な啓発活動しかないのが実情です。そういった中、朝夕の見守り隊や、交通安全の立しようなどを続けてこられた市民の皆さんの強い想いや活動があつてこそ、今の廿日市市があると思つています。未来ある子ども



たちを、悲惨な事故から守りたいという強い思いを胸に、活動されている皆さんには本当に頭が下がる思いです。

わたしたち「くらし安全指導員」は、そういった市民の皆さんの意見を聞き、一緒に考え、一緒に行動し、安全・安心なまちをつくつていきたいと考えています。

心身ともに発達段階にある子どもたちは、好奇心が旺盛な反面、注意力が低く、交通ルールの理解も未熟なことから、思いがけない行動に出ることがあります。交通安全に関しては、小さいころからの繰り返し学習が効果を奏します。要望があれば、市内の各地域や学校、保育園などで交通安全教室を行いますので、遠慮なく問い合わせてください。また今後は、防犯に関する講習なども検討しています。

交通事故は、誰だつて起こしたくて起こしているわけではありません。しかし、悲しい交通事故がなくなるには、「事故の本当の怖さを知らないから」であり、「自分だけは大丈夫と思つているから」なんです。誰にも、自分を大事に想ってくれる人がいます。その人たちの悲しませないために、普段の生活の中で、危機意識を高めてほしいと思います。

### 免許証を返納する勇氣

加齢とともに身体機能は変化します。そこで、自動車運転者が運転免許証を自主的に返納できる制度があります。運転免許を返納した方は、身分証明書としても使える「運転経歴証明書(手数料1,000円・有効期限なし)」を申請することができます。

また、身分証明書として使用できるものに、市役所で発行する「住民基本台帳カード(手数料500円・有効期限10年)」があります。

### 問合せ

運転経歴証明書に関すること  
廿日市警察署 ☎0110  
住民基本台帳カードに関すること  
市役所市民課 ☎9135

### 第9次廿日市市

#### 交通安全計画を策定

廿日市市交通安全計画は「交通戦争」の時代と言われた昭和46年に第1次計画が策定され、以来5年に1度、計画を見直しています。

今回の第9次計画では、「高齢者・子ども」、「歩行者・自転車」、「道路における安全確保」の交通事故防止を重点的に取り組めます。

また、①交通安全教育の充実、②高齢者の運転免許証自主返納の促進、③救急医療体制の整備、④安全・円滑な交通環境の整備を主要施策としています。